

『往生要集』に於ける五念門の歴史的意義再考

久米原 恒 久

五念門の修相は、法然上人が示す所謂「三經一論」の一論である世親著『往生論』に説かれる、浄土への願生起行であり、奢摩他、毗婆舍那の双運による、観見を中心とする願生行に他ならない。元来、称名一行を中心とする易行易修（勝劣も含め）の立場に立つ道綽・善導流の念仏からは、明らかに一線を画すものであり、その大成者と目される法然が、何故『往生論』を選取したかについては、その著作の中に理由が示されていない事も手伝って、諸々の論義がなされている。ここでは、五念門・世親→五種正行・善導（印度・中国）、同じく五念門・源信→五種正行・法然（日本）という浄土願生行の二つの類似したパターンが、約五百年の隔たりを経てくり返されたと見る観点に立ち、今一度その具体的様相の一端を要約してみたいと思う。この為に題材を源信の『往生要集』とし、本書における法然教学の転換点を五念門の受容を通して探ってみたい。

五念門は、『無量寿経優婆塞願生偈』の長行の中に創設

された修相であり、著者は瑜伽唯識思想の重鎮、婆藪槃豆 Vasubandhu 世親（四〇〇～四八〇年）である。五三一（普泰元年、又は五二九年との説もある）年に、菩提流支によって漢字訳が施され、やがてこれを受けた曇鸞（四七六～五四三年）は『無量寿経論註』上下二巻を著わし、本書に凡夫相應行としての解釈を加え、以後の思潮に大きな方向付けをなさしめたのであった。この流れを受けとめた道綽（五六一～六四五年）は、『安楽集』二巻を著わし（五念門という名称の引用はない）、末法における凡夫得脱の途を模索した。この直弟、善導（六一三～六八一年）は『往生礼讃偈』一巻を著わし、この中で五念門行を受容したが、既にその真意は、凡夫相應の称名行中心の新らたなる行体系構築に動いていたのである。かくして、安心、起行、作業という実践体系の中に、起行として位置づけつつも、『観無量寿経疏』散善義に提示される五種正行を、五念門にかわる実践体系として、後に高らかに掲げることになるのであった。我が国においては、三論宗の智光（七

『往生要集』における五念門の歴史的意義について（久米原）

一六八

〇九七七〇又は七八〇年）が、『往生論』や『往生論註』をうじてこの五念門をうけとめ、独自の解釈を施すに至った事が、初期における受容として特筆される外、中川実範における解釈等にもある如く、浄土往生を目的とする行規範として、常に中心的存在として認められていたのである。やがて、天台僧恵心僧都源信（九四二—一〇一七年）は、『往生要集』を著わし、濁乱せる世相を背景に、阿弥陀仏国への願生を究極的目的に、五念門行をその中樞にそえ、念仏一門による得脱を宣するに至ったわけである。やがて、これに接した法然は、『往生要集』によって浄土教信仰への転機を得、やがて念仏一行による末法における凡夫得脱の途を打ち出すことになるのである。しかし、それは同じく『往生要集』に援用せられた、唐の善導大師への傾倒という動きをも伴うものであった。やがて、六十六才選述とされる『選択集』に示されるが如く、所謂称名正行を中心とする五種の正行が、法然における行体系の中核として、五念門行に換置されるが如く、最要なる行規範として提示されるに至るのである。ここに、中国、日本、両国における浄土教理史上、同軌の営みの跡を見る思いがするのである。

私は前述の如き流れの中で、五念門を理解すると共に、法然が浄土宗を開宗するに当って、源信に導びかれ会心の糸口を見出ししたにもかかわらず、何故さらに善導大師の教学へ

と身心共に歩を進めざるを得なかったのか。この課題を開明する為に『往生要集』における『往生礼讃偈』の引用に焦点を合わせ、この「何故」という点を検討してみたいと思う。善導大師は『往生礼讃』（以下、かく略称す）前序において、五念門を示し、その中で

五門既具定得_二往生_一二一門与_三上三心_二合随起_三業行_一不問多少_二皆名_三真実業_一也_レ応_レ知

といい、五念門を成就すれば往生する事が出来る。しかし各々の門には必ず三心が具足されていなければならない、さらに三心が具足されれば、たとえ、五門全てが成就されなくとも真実の業と言い得るとしている。大師においては、既に五念門に対する三心の優越性が意識の中に存在している事を認めねばならない、と解釈すべきではなからうか。

更にこの三心中の深心積において「信知……称_二名号_一下至_三十声_二一声等_一定得往生」といい、『往生論』や『往生論註』においては五念門行中の第二、讃嘆門において説かれ来った称名が、所をかえて提示されているのである。凡夫相應の修相として称名念仏に絶大なる意味を見い出す善導にとつて、称名行を五念門中に説く事は全く首肯できないものであったのだ。そして、より高い価値を具するものと考える三心（釈）の中に、改めて提示する形をとったのである。さらに、前序の後半の文に『文殊般若経』の一行三昧を掲げ、さらに後序

における称名の再説などを鑑みるとき、改めて五念門という伝説的願生規範に対する、称名一行の優越性が、明瞭に打ち出されているものと理解することが出来よう。

それでは、善導の教学に強い影響を受けた、源信においては如何なるものであったろうか、『往生要集』全巻の中に、この三心と称名のとり扱いをたどってみたい。

本書の中『往生礼讃』の引用は『摩訶止観』、『観念法門』と並んで、同書における修行方法を示す大変重要な部分を担っている。

修行方法多在^{卷十}摩訶止観及善導和尚観念法門並六時礼讃^{卷各一}

とあって、その重要な立場が示されている。この他には迦才『浄土論』八例、道綽『安樂集』十二例、慈恩『西方要決』一四例、懷感『群疑論』二十五例など、他著からの引用例も多数にのぼるが、右掲の引用文にもある如く、内容的には浄土往生業の骨格は、特に『往生礼讃』と『観念法門』によっていることは確かである。又『往生礼讃』引用の特色を見ると、その引用箇所が前序及び後序に限られていることである。その前序とは、第一に安心起行作業の説明として三心、五念、四修が示され、第二に専ら称名念仏を修する事が示され、一行三昧が經典引用によって明示されると共に、問答によって疑を解し、第三に専雜の得失を論じて全体を結するという構成からなっているが、これら全てが浄土教理史上、誠

『往生要集』における五念門の歴史的意義について（久米原）

に重要な意味をもつものばかりなのである。源信は、『往生礼讃』に、教学上における重大な意義を認めつつも、この部分を特に依用していた事に着目したのである。ここで、実際に文に即し、これらの引用を検索してみたいと思う。

『往生要集』には、『往生礼讃』からの引用が、次の如く九例みられる。

(一) 又有善導和尚六時礼法。不可具出。設無余行。但依礼拜。亦得往生。

これは直接引用ではないが「善導和尚に六時の礼法有り」としているところから、『往生礼讃』における六時礼讃を指すものと思われる。

(二) 善導禪師云。

畢命為期。誓不中止。

この文は『往生要集』第五「助念方法」第二、「修行相貌」に説く四修の初めに明らかす長時修の説明に引用する。

(三) 面向西方者最勝。如樹先傾倒必隨曲。必有事礙。不及向西方者但作向西想亦得。

この文も、同じく「修行相貌」に説く四修の第二、懸重修に引用される文である。この文は『往生礼讃』に説く、四修の文ではなく、四修の後で説く『観經』により面を西に向かわせることを説いた文である。『西方要決』に基づき、懸重修と称しているわけである。

『往生要集』における五念門の歴史的意義について（久米原）

一七〇

(四) 心心相続。不以余業間。又不以貪瞋等間。隨犯隨懺。不令隔念。隔時隔日。常令清淨。

これもやはり、「助念方法門」第二に説く四修の第三、無間修の説明に引用されたものである。この「隨犯隨懺」こそ、善導念仏の性格の一面を端的に表わすものであり、この部分に着眼点が定められている事は、特に注目すべきであらう。

(五) 専称彼仏名。專念專想。專礼專讚。彼仏及一切聖衆等。不雜余業。

これも同じく無余修の説明に『西方要決』に続いて引用されるものである。

(六) 一至誠心。謂礼拝讚歎念觀。三業必須真実故。二深心。謂信知自身是具足煩惱凡夫。善根薄少。流轉三界。未出火宅。今信知弥陀本弘誓願。及称名号。下至十声一声等。定得往生。乃至一念。無有疑心。三廻向發願心。謂所作一切善根。悉皆廻向。願往生故。具此三心。必得往生。若少一心。即不得生。

これも、やはり修行相貌において、四修の用心として用いられている文であり、ここでも善導による三心釈が依用させられているのである。

(七) 若入觀及睡時。應發此願。若坐若立。一心合掌。正面向西。十声称阿弥陀仏。觀音勢至諸菩薩。清淨大海衆竟。而發見仏菩薩。及極樂界相之願。即隨意入觀。及睡得見。除不至心。

やはり、修行相貌において、四修、三心を解く段に続き発

願について説明するところに引用されている。これは本文から本願摂受と身相光明等の示現を願う文が省かれており、発願見仏の解説として引用されている事が分る。

(八) 衆生障重。觀難成就。是以大聖。悲憐直勸。專称名字。大文第七、念仏利益門の第三において、専称名字の見仏を解き勧める所の引用である。

(九) 若能如上。念念相續。畢命為期者。十即十生。百即百生。若欲捨專。修雜業者。百時希得一二。千時希得三五。

大文第十「問答料簡」第二「往生階位」において、九品の往生を論ずる所に引用されたものであり、細註によると三心、四修をもって五念門を修するものは百即百生すると説いている。しかし、『往生礼讃』では、称名念仏のみの、一行相続による百即百生を説く文となっており、若干意味の転用が見られる。

以上『往生礼讃』の引用九文のうち、初めの一例は引用文ではないが、五念門の中の礼拝門を行ずるについて、龍樹の『十二礼文』によるのを広行といい、これに関連して、善導にも「六時礼讃」による礼拝行のあることを示したものである。次の六例は、全て四修と三心の説明に引用されている。各々の引用文は省略されたり、本来の意とは異なった意図を付加されたものなどがあるが、四修法の説明に引用せられた四例は、釈解の中樞をなす解説文として位置づけられている。

事に注目したい。そして、この四修を行ずる時の心の用い方を示すに当って、はじめて『往生礼讃』の三心釈が依用せられているのである。つまり、三心は『往生礼讃』にては、浄土往生の起行であるところの五念門行を修する時の安心として、いわば往生への必須要因として位置づけられているのに対し、『往生要集』では五念門を「正修念仏」とし、その中心たる観察門（観念）を助成する為に「助念方法」を立て、その中の一分科（全七科）において提示され、観念を相続する方法（四修法）の用心として取りあげられているにすぎないのである。善導においては、修道の根幹であった三心が、源信においては、いわば縮小された価値（位置）づけをもつて吸収されたと見られるのではなからうか。

一方、ここで称名のとり扱いについても、若干ふれてみたいと思う。

『往生要集』第五、「正修念仏」において示される五念門の中、第四の観察門において説かれる観法は、易行化の色彩を呈したものとなり、理に対する事として、まず別相、総相、雑略の三観がうち出されている。

しかるに、これにも堪えざる者に対しては、「もし相好を観察するに堪えざるもの有らば、域は帰命想により、或は引接想により、或は往生想により、応に一心に称念すべし」と再説している。ここに見られる易行化は、むしろ観察の範囲内

に顯著に示されているものだが、作者自身の自己省察を背景としてなされているものであり、甚だ主観的なものである。この称念は、智顗が『摩訶止観』の常行三昧を示すに当って、休息なく行道しながら唱念ともに運ぶことを示した中に一貫する「一心称念」を継承したものであった。源信は智顗の示すとおり「もし坐して疲極し、あるいは疾病に困しめられ、あるいは睡蓋に覆われ……正念の心を奪い、遣却すること能わざる」人の為に名字を称せしめるという立場と、同一の認識の上に立って「称念」を勧励していたのである。つまり、観念に堪え得る人であっても、病氣や老衰、命終に臨むといった場合は、この称念を修すべき人となるのである。又、『往生要集』第六、「別時念仏」において命終時の行者に対し、十事の観念を示しているが、そこで説かれる念仏行も、正しく帰命、引摂、往生の各想にわたる念仏であり、ここでも諸の事観にすら堪え得ない臨死の者に対し、「称念」が説かれているのである。この様に帰命等の三想念仏は色想観すら行じ得ないが、語黙作中に、常にこの念を胸中におく事の出来る人を正機とし、更には臨終の人の為に創設されたものと理解できるのである。かく判断するならば、三想に一貫する「一心称念」は、正しく「観」の枠から外れた行として、位置づけられていると見なければならなくなるのである。

先に記した『往生礼讃』における「称名別立」と、右の三

想を背景とする「称念」別立は、「観」を目途としないという、同一の理念に立脚するものとして理解する事が出来よう（無論、観の助成としての称念も存在する事は当然である）。しかるにその価値づけについては、単に易行であるとする理由によって立つ傾向の強い源信と、末法時一切衆生を凡夫と認定し、これに相応する唯一最高の価値を有する、「独立一行」として設定する『往生礼讃』における称名の意とでは、相当のへだたりがあると見なければならぬのである。

以上、『往生要集』における五念門の受容を見たわけであるが、法然教学との落差を捉えようとした場合、三心と称名（念）の扱い方の差異が、両者を隔てる大きな関門となっている事を指示したのである。坪井俊映氏の指摘によるまでもなく、『往生礼讃』は前後九回にわたって『往生要集』に引用（改文を含む）されている、しかし、こと五念門に関していえば、わざわざ『礼讃』がその順序を組み替え、三心を背景（安心）とする称名念仏一行を独立せる最高価値のものとして別立した、その真意は必ずしも満足すべき形で受け継がれたとは言い難いのである。善導がその教学中、最も尊びかつその中核に位置づけた三心と称名、これが源信の教学の中で、さらに高い価値付けをもって受け入れられていたなら、以後の法然の会心に如何なる影響を及ぼしたであろうか、甚だ興味深いものを感じるのである。

以上、五念門の浄土教史上に果たした役割りと、又そこから流れ出る新たな潮流、方向付けといったものを概観したわけである。

浄土の祖師方の多くは、悉くこの五念門に接し、又、これに自分なりの解答を加える作業を通じて、独自の教跡を歴史の上に記していったのである。紙面の都合上、問題提起の域を脱しない論考となったが、かかる視点に立った、より深い考究が、今後更に重ねられ、法然浄土教における五念門の位置づけが適確になされる事を願うものである。

△キーワード▽ 往生要集

（大正大学総合仏教研究所研究員）

掲載されなかった諸氏の発表題目（六）

弘法大師教学における因果論 静慈円（高野山大学同学会）
門弟よりみたる西山證空 中西随功（西山短期大学）『法然上人伝記』（九巻伝）の諸本について 野村恒道（大正大学総合仏教研究所） 良遍撰『因明相承秘密鈔』について 坂上雅翁（淑徳短大） 親鸞の仏教史観の展開―尊號眞像銘文を中心とする一考察― 幡谷明（大谷大学） 愚禿親鸞と西田哲学 植野光悟（植野文庫） 親鸞における回心 花山勝友（武蔵野女子大学） ボロブドールの宗教世界について 木村清孝（東京大学） 耐久学舎と裁松居士・宝山良雄 松本皓一（駒沢大学）